



徹底した安全対策も同社の競争力を支えている

## 産業界を支える オンリーワン「硫化技術」

医薬品や電子材料の製造に欠かせない硫黄化合物。  
長い歴史を持つ伝統企業が見据えたものは――

ない。例えばデニムジーンズに使われる洗いが良く、色ブレや染めムラが少ない高品質の染料などの製品を供給している。その他、シリコーン事業も手掛けている。

同社は一九三二年に硫化染料からスタートし、繊維産業の発展とともに順調な歩みを遂げていった。ところが、産業構造の転換により次第に繊維産業が衰退していったため、脱染料の道を模索。六五年ごろには、染料で培った硫化技術を生かして、化成品事業に進出した。

だが、化成品での実績がないこともあり、当初はなかなか顧客の信頼が得られず、経営的にもしばらくは苦闘の時期が続いた。流れが変わったのは、九〇年代後半になってから。当時の山之内製薬が発売し、大ヒットした胃腸薬「ガスター」の原料（中間体）として、同社の自社製品が採用されたのだ。

「中間体を作る過程では硫化水素を使う工程がありますが、硫化水素のハンドリングは容易ではなく、設備や社員教育も含めていろいろノウハウが求められます。その点で技術力を中心とする当社の総合力が認められ、採用されたのだと思います」

これを機に、同社製品への信頼も一気に高まり、以降は化成品事業を核として、順調に業容を拡大して現在に至る。近年では、自社製品の新たな用途開発や新規取引先の開拓にもさらに力を注ぐ。現時点では、化成品を例にとると顧客の大半は国内だが、海外での売上比率を高めていくことが今後の大きな目標だ。

そうした中で、社内的にはダイバーシティーの推進が目下の最大テーマだ。国籍・性別・年齢などに関係なく誰もが活躍できる企業を実現すべく、今年は積極的に海外人材を雇用。近年は少なかった新卒の女性研究職も採用し、これから工場などの職場環境の改善も進めていく計画だ。

「今後は名実ともにダイバーシティーの会社になりたい。そして、硫黄化合物という当社のオリジンをもう一度皆で再認識し、この分野で世界に飛躍していければと思っています」



代表取締役社長  
大野陽之氏

「当社は、創業当初から硫黄と化合物に関する合成技術で、専門性を生かしてさまざまな業界のニーズに対応しています」

大阪市に本社を置く旭化学工業代表取締役社長の大野陽之氏は、こう語る。同社は硫黄化合物を中心とする有機化合物の製造・販売および受

託生産を行っている企業だ。

現在の主力は、化成品（フアインケミカル）事業。高度な硫化技術を駆使して、国内で唯一生産している自社製品も数多く、その用途は医薬品やパーマ液、電子材料の表面処理をはじめ多岐にわたる。また、染料事業は硫化染料のバイオニア的存在であり、今では国内に競合はほぼい